

巻頭によせて

院長 丹野三男

「哲学する医師養成」を理想として掲げる産業医科大学では、医の倫理を教える医学概論2単位の文部省の方針を押し切って6年間を通して必修課目とし、22単位に広げた講義を行っているということでもあります。

病院長の外科教授西村正也氏は医師と患者との信頼関係は日常の診療を円滑に進めるためには勿論のこと、新しい治療や手術方法を開発する上に於て極めて大切であり、医師の情熱と患者の勇気が見事に結集した episode として次のような症例を述べております。

西村氏が心臓の直視下手術を行うため、数々の動物実験を重ねて遂に成功し、臨床に應用出来る段階にまでなりました。昭和35年頃ですが第1例となる希望者は仲々ありませんでした。

その中、心房中隔欠損症の国武勝彦君という14才の中学生が、自分が第1例として手術をうけたいと申し出ましたが、両親や家族が承知しない、然し本人がどうしてもやってもらいたいと強く希望して両親を説得し、手術をうけたとのことでした。

幸いに成功し、これを契機に手術希望者が次々と出て、漸く直視下心臓手術が軌道にのることが出来た、この国武君という少年は今は立派な社会人として活躍しているが、自分を信頼してくれた、真に勇気ある患者として生涯忘れることが出来ないと述べております。

又 Boston の Massachusetts General Hospital の Ether dome にはこの講堂で1846年10月16日、初めて Ether 麻酔に成功した歯科医 William Thomas Green Morton, 外科医 John Collins Wallen と共に、第1例として麻酔をうけた Gilbert Abbott という患者の名が刻みこまれておるといふことです。

毎回当院雑誌にも数々の症例研究が発表されておりますが、臨床の場に於ては患者こそ優れた教師であり、患者の信頼と協力が得られる医師であることが良い医療の出発点であることを改めて感じ、巻頭の言葉と致します。